

日本福祉教育専門学校（東京都新宿区）の 「カイゴのミライ」

学校法人敬心学園の日本福祉教育専門学校（校長＝陶山哲夫氏）は、介護技術だけでなく、プラスアルファの実践力をつけて10年後、20年後に活躍できる人材を育成しようと、IT、ロボット、アロマテラピーなどの5領域が学べる「カイゴのミライ」プログラムを導入している。

介護福祉士養成施設の入学者が減少傾向にあるなか、他業界での活躍も視野に入れた魅力的なプログラムは、学生の関心も高く、2017年度の入学者数の増加につながった。将来ビジョンも見据えた介護や福祉の人材育成に取り組む教育現場とその想いをレポートする。



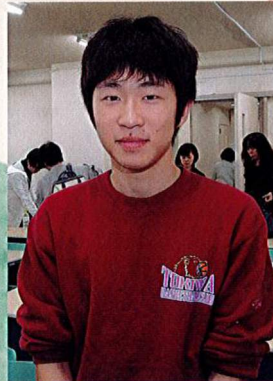
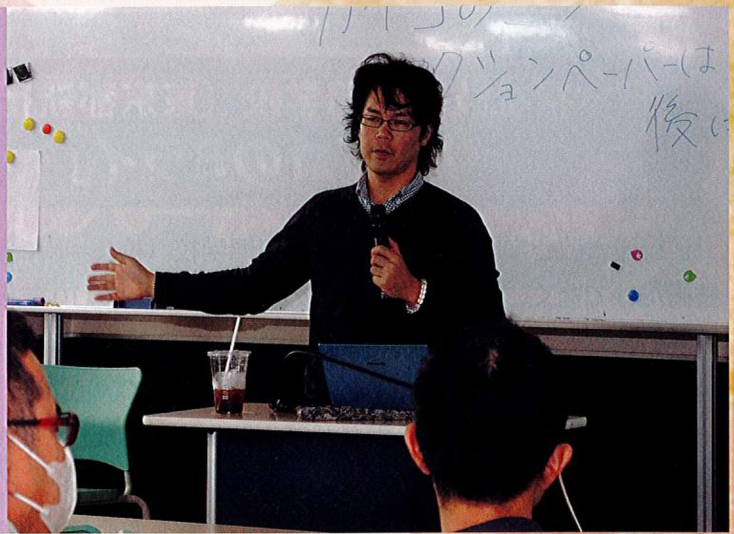
IT・ICTをテーマにした「カイゴのミライ」の授業の様子



未来の介護を学ぶ授業で
社会のニーズに応える人材を育成



IT・ICTが介護を取り巻く環境をどう変えるのか、そして10年後の介護はどうあるべきか？などの課題をクラス全体で考える授業を3回シリーズで行った竹下氏



小川拓未さん



許太平さん

ITや介護用ロボットなど 将来役立つ5分野でスタート

日本福祉教育専門学校の「カイゴのミライ」は、将来にわたって活躍できる介護福祉士になるための知識や技術を、各分野の第一線で活躍する企業から学ぶ新たなカリキュラムで、2017年度にスタートした。通常の介護福祉士基礎教育プラスアルファの知識が得られると、学生たちに好評だ。

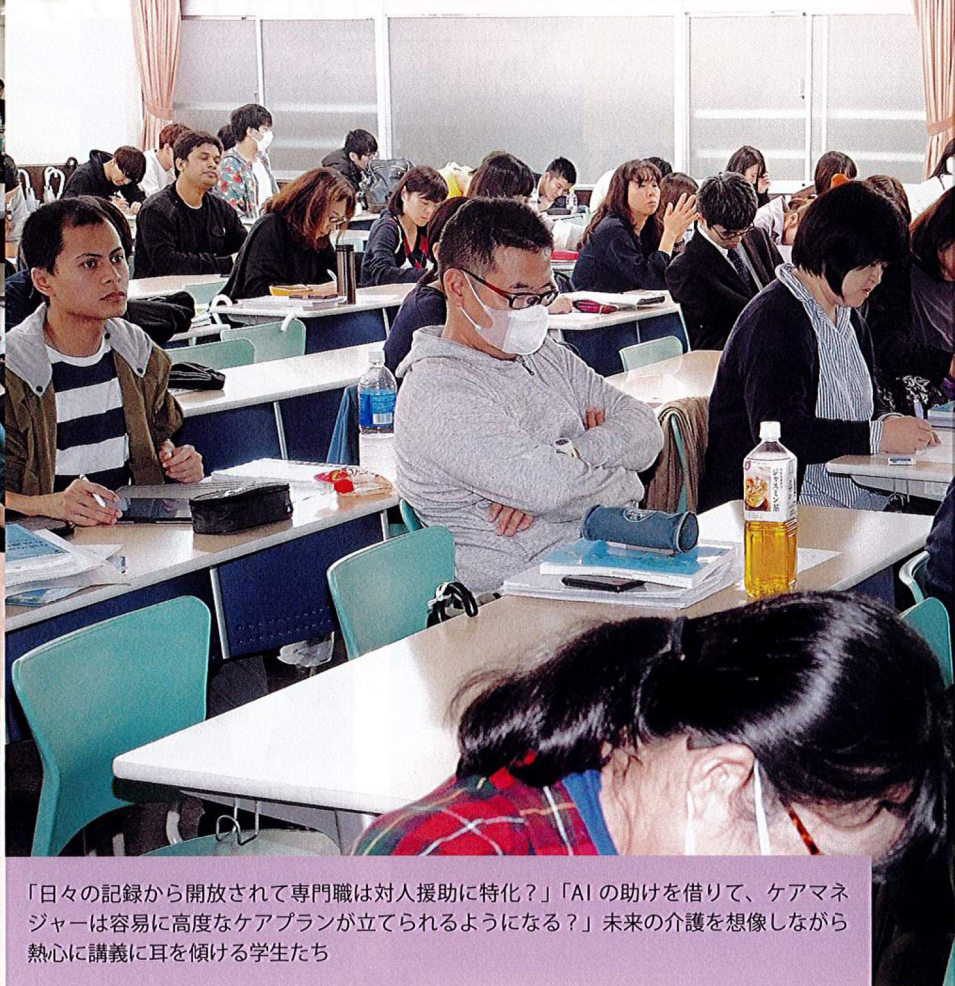
介護の現場で今後活用が期待されるIT・ICT・IoTをはじめ、ロボットケア、コーディネーション運動（介護予防）、トラベルヘルパー（外出支援）、ハンドケア（セラピー）の5つのカテゴリがあり、学生たちは希望する授業を選択し、グループワークや座学、実技等をおして楽しみながら学んでいる。

取材した日は1年生を対象にしたITの講義。介護職は苦手意識が強い分野といわれるが、上手な活用で仕事の効率化につながるだけでなく、介護ロボットや福祉用具が扱える介護福祉士のニーズが現場で高まっていることもあり、学生の関心も高く、希望者が集中した分野だ。大教室はほぼ満席だった。

「描こう！技術の進化がもたらす介護の未来像」をテーマに、株式会社ビーブリッド代表取締役の竹下康平氏が、介護現場のICT化の現状を紹介しながら、最新技術が現場にもたらす変化などを解説すると、学生たちはスライドをみつめて熱心にメモを取っていた。

授業に参加した許太平さんは、「スマートフォンを活用している実習先でも、記録情報を共有し、その利便性を実感しています。多くのIT関連の映像を見て、これから介護業界でIT技術がどう活用できるか楽しみになりました」と、実体験に結びつけて感想を語ってくれた。小川拓未さんは、「ITは便利な技術ですが、ITだけで生活、仕事をまわすことが可能になると、逆に自立支援やQOLが実現できなくなる可能性も感じました。QO





「日々の記録から開放されて専門職は対人援助に特化?」「AIの助けを借りて、ケアマネジャーは容易に高度なケアプランが立てられるようになる?」未来の介護を想像しながら熱心に講義に耳を傾ける学生たち



介護福祉学科長の細野真代氏

保護者や教員の 介護のイメージを変えようと企画

上の向上や自立支援の部分を専門職が支援することの重要性も考えました」と、少しはにかみながらも、未来の介護福祉士らしくコメントした。

「カイゴのミライ」は、1年次後期に1カテゴリーにつき3回講義がある。1年次は希望すれば全カテゴリーを学ぶことも可能で、選択性の2年次にも同じカテゴリーを選べば、さらに学びを深められる。カテゴリーによっては認定証なども取得できるが、通常の授業料以外の追加負担は一切なく、あくまでもプラスアルファの学びとして受講できることが大きな魅力だ。

「カイゴのミライ」をスタートした背景について、介護福祉学科長の細野真代氏は、次のように説明する。

「養成校の入学人数が減少傾向にあり、介護のマイナス面を取り上げる報道も多いなか、入学を希望する高校生の保護者や教員がもつ介護のイメージを少しでも変えることができたらと企画しました。また介護職も、これまでは基本的な技術があれば仕事をこなしていけましたが、高齢者や障害者が増える10年後、20年後は、利用者のニーズも多様化します。それに合わせたケアが提供できる介護福祉士なら、資格取得後も自信をもって働き続けられるのではと考えて、将来役立つ資格の取得や学びの機会を提供しています」。

高校生向けの入学案内パンフレットで「カイゴのミライ」を紹介したインパクトは大きく、2017年度の入学希望者数は前年比でほぼ倍増。その結果、入学者数も大幅に増えた。

「もちろん、私たちが大事にしているのは介護の基本なので、『カイゴのミライ』があるから入学者が増えたというよりは、『カ





「カイゴのミライ」は5分野の企業連携により実現した。IT分野を担当する竹下氏のほか、ロボットケア（写真①）は粕川隆士氏（湘南ロボットケアセンター）、外出支援（写真②）は篠塚恭一氏（日本トラベルヘルパー協会理事長）、介護予防（写真③）は東根明人氏（コーチングバリュー協会代表理事）、セラピー（写真④）は池田明子氏（ソフィアフィットセラピーカレッジ学校長）がそれぞれ講義する

高校生向けの「カイゴのミライ」の案内パンフレットやチラシは職員の手づくり

学びやすい環境にするため 授業時間を切り上げ

「イゴのミライ」によって介護に興味をもち、実際に来校して学校の雰囲気や先輩、教員との距離を実感した人が増え、結果的に希望者が倍近くになったということです。その旗振り役としての効果は大きかったと実感しています」（細野氏）。



「カイゴのミライ」の実施と合わせて、通常の介護福祉士養成課程（1850時間）のタイムテーブルも大幅に見直した。景気が低迷する昨今、授業料の支払いが継続できるかが不安で入学を断念する学生もいる。そうした学びたい意志のある学生が安心して学べる環境づくりも必要だと、休憩時間を思い切って短縮し、夕方4時過ぎだった授業の終了時刻を午後2時半に切り上げた。これが子育てや就労しながら学びたい人にも好評で、既卒者の入学者増に結びついたという。

学生の興味や関心を惹き、介護のイメージを変える新たなカリキュラムとともに、介護を志す人が学びやすい環境づくりにも取り組んだことが、希望者や来校者の増加、そして入学者の増加という結果につながった。

「カイゴのミライ」は、必須科目ではないが出席率が高く、学生たちの反応もいい。授業も活性化している。細野氏は、「今後社会の要請に添って先進的なことに挑戦しつつ、質のよい介護を提供できる人を育てる教育を継続します。教育現場にも、介護・福祉サービスの現場にも、解決しなければならないことはまだまだあります。そうした課題に対して、歴史ある教育機関という自負のもと、つねに半步先をめざしてチャレンジしていきたい」と、まさに介護の教育現場の未来についても展望した。